

佛教大学

仏教文化研究所報

第 5 号

昭和62年 7 月 31 日
発行

目 次

- ・面壁九年——文・義・意について——坪井俊映……1
- ・初期有部阿毘達磨仏教の状況(下) 村田善夫……2
- ・『釈浄土群疑論』における別時意趣 会通について(その二) 村田善夫……2
- ・『中国における別時意趣』 村上真瑞……5
- ・『大般涅槃經集解』の撰述について 大澤亮我……7
- ・唯識思想の識とデカルトの我——「中辺分別論」と「方法序説」——をもちに 竹内真道……9
- ・謝靈運の『仏影銘』制作年時について 鶴岡光昌……1411
- ・編集後記……
- ・Suyagadanga 第一編第4章の研究 榎本正明……16
- ・part (1)——源泉資料考(1) 神田隆司……18
- ・Nenpakavanya 源泉資料考(1) 神田隆司……18

面壁九年

——文・義・意について——

坪井俊映

「面壁九年」とは中国へ禅法を伝えた菩提達磨が、嵩山少林寺において専心坐禅したときの有様を伝えた物語りである。達磨は壁に向って九年間、一語も発せず坐禅して思索思惟をこらしたという。そのために足が立たなくなり、「ダルマサン」という人形には足がないのは、これによるといわれている。この事実については一考すべきものがあるが、ただ坐って居眠りしていたのではなく、また黙して啞者のように九年間、無為に坐っていたのではない。「黙して坐す」とは仏教の本義について深く思惟し哲学したことをいうのである。

禅の教えは般若思想を基とし、存在の無自性空の諦観を説くものである。面壁九年とは九ヶ年の間、禅が本義とする般若空の思想を思索し思惟したことをいうのであって、文字語句の解釈や表相的な内容理解に止まらず、その奥にある本義を把握するために憶念観想をこらすことをいうのであろう。仏教は智慧の宗教といわれるほど思索的要素を多くもっている。俱舍、唯識、華嚴、天台等の教学が深い哲学的なものをもっているのは、そのためである。

法然上人の門人で、現在西山浄土三派の祖とされる証空上人がある。証空上人は法然上人が説かれる念仏に対して、南都北嶺の仏教者より、浅薄な教えであり、粗雑な行である。また能力の劣ったものが行ずる方便の教えであるという種々の非難批判に對して、護教的な考えより念仏の教えが深遠な思想体系を有するものであり、価値ある行であることをあきらかにされた。それは天台教学が説く一乘開會、三權一実等の思想の思考形態を用いて、念仏とそれ以外の各種の修行(諸行)との關係を解説して、師法然上人が説かれる念仏に新しい意味と価値とを附与された。証空上人は經典および

び祖師の釈書を読み理解するにあたり「文・義・意」の三方法(立場)によって解明すべきことをあかされている。
「文」とはいうまでもなく、經典祖釈に書かれている文字語句を正しく読むことである。
「義」とはその文字語句によってあかされている意義内容を十分に理解することである。普通一般の經釈に対する理解は大体この段階で止まっているようであるが、証空上人はさらに「意」という方法(立場)を示している。
「意」とはいうまでもなく心のことで、經典を説かれた祖師の心を伺うことであり、釈書を著わされた祖師の精神、本意を読みとることである。これは文字語句の中(裏)にある真意を見ることがであるが、これは容易なこととは思われない。經典釈書の全体を十分に理解した上で、さらに思考を加えねばならない。
經典釈書はそれぞれ対機、応病の教えであるから、説かれた時代社会を異にし、対象を異にしている。その内容も広狭浅深があつて千差万別であるから、内的事情を十分に把握することなくしては仏の本意、祖師の真意をとらえることができないであらう。

文々句々の辭書的な理解に止まるならば「もの知り」とは云われるが、經典釈書の深い内容は知ることができないであらう。これはあたかも盲者が象の一部にふれて、それをもって象の全てとするようなものである。

証空上人が「文・義・意」なる言葉によって示されるものは、深く内容を思惟し思索すべきことをいわれたものと思う。達磨の「面壁九年」の物語りは証空上人の言葉を借りれば「意」の方法(立場)と思われ、深く考え思索して本意を把握することと思われる。

仏教は書物の宗教といわれるほど多くの經典釈書があり、これに対する研究者の論著もまた多く、汗牛充棟もただならずという状況である。したがって、その全てを知りつくすことは不可能事であるが、自己が志向する学問に對して「面壁九年」「文義意」の語は深く心に止め置くべきものでなからうか。